

Description of the plates, representing the itinerant traders of London in their ordinary costume. London, Richard Phillips. [1804], 30 plates 28.1×22.3cm <383.133-D>
Hiler p.232

Londonの呼び売りは、15世紀初頭から伝統ある街の風物詩として親しまれてきた。農作物や日用雑貨をはじめ庶民の生活にかかわる一切が呼び売りの対象となり、独特のリズムと言い回しは、画趣あふれる服装と相俟って文芸、絵画、音楽の各分野に格好の題材を提供した。最盛期には、その種類は400を越え、その呼び声は騒音公害として物議をかもすこともあった。こうした呼び売りにまつわる諸事情は、そのまま各時代の社会や文化を反映するものとして学術的研究の対象となった。

皮表紙にマーブル模様が配された美しい装丁の本書は、Hilerによると1804年の刊行とされている。手彩色が施された31枚の銅版画は、物売りの説明とその背景となっている London 市内のきわだった場所の紹介が付けられている。彼らは手作り商品や近郊でとれる農作物を手押し車、荷車、屋台、あるいは頸から吊るした売り箱で売り歩く。その呼び声は品物によって様々で人々の注意をひいた。民族服を着たユダヤ人はモロッコのスリッパを、ターバンを巻いたトルコ人は香料を、そしてウェールズの少女は、肩からブリキのミルクバケツを吊るして1クオート(約1.14l) 4ペンスのミルクを売り歩く姿等、多種多様な品物売る男女が描写されている。その服装も、年齢層も、階層も多様で、当時のロンドン市民生活記録として大変興味ある行商人図絵である。31枚の図版には、画家、彫刻家は記されていないが、それぞれの図版に付された解説は、品物を売り歩く時間(時期)、品物の値段、服装、呼び声が記され、背景に描かれているロンドン市内の街角や同りの説明が加えられている。描写も写実的であり、19世紀初頭の服飾風俗資料としても価値ある手彩色銅版画集となっている。(内野)